かりの老人でございます　二「イヤ此方へ入んなさいウム名は只今承知した、ハイ〳〵俺が一休、して遙々と伊勢から參つた何の事ぢやな」

三「元來氣輕な禪師殿、心は高く氣は低く隔を置かぬ御尋ねに恐入つたる德右衛門」

四「ハイ御尋ね有難き事に存じます、では御願ひの筋一應申上げまする」と、

「語るを聞けば哀れなり、其主人大貝濱之亟が次男鶴丸とて、幼にして才長男に增し、父の寵愛限りなく、生長なせばなす程に武藝學

問凡ならず、此上無き者と思ひしを、噫無情なる世の風よ苟の病ひの床に打負けて歸らぬ方へ逝き給ふ。」

老家臣長島德右衛門涙さへ浮めて　德「其ればかりではござりませぬ鶴丸の身逝りましたるより其母人が痛く氣を病みましたが原因で七日と經ませぬ内に其跡を逐ふて去りました」

「殘りし惣領甚内は、家來の口には憚りあれ次男に劣る育立柄、主人濱之亟が落膽は誠に見るも痛はしく、鬱々として一間の内、閉籠られて居りましたが。」

「偶と此頃返らぬ事と思ひ諦められまして、せめて去りし者の

菩提の爲と一宇建立致し地藏尊を安置する事に相成ましたのでございます其れに就きましてお徳高き禪師様をお迎へ申し其の地藏尊の開眼を願はしく出ましてございます」と言ふのを聞いた禪師は

二「ア、然様かい地藏の開眼をして呉れといふのか、宜しい〳〵

三「早速の聞き濟み有難き事に存じます主人濱之亟如何ばかりか喜ぶ事でございませう」二「それで其地藏はモウ出來て居るのかね

三「イヱ未だ取り掛りませぬのでございます、して禪師様御出下されまするは何日頃にございますか」二「左様、ナア新左衛門恰度旅立の序に可いプラリ〳〵と明日遊り出掛様か其れが宜しふございます

禪師様には何處ぞへか御出に相成ますので」二「ア、島渡國々を巡つて見様と思つてナ……新左衛門草鞋は成丈け丈夫でなくちや不可んナ」三「大きに左様で」イヤ實に氣樂なものでムいます、京都から伊勢と云つても近い處ではない、其れを國々を巡らうと云ふのに此安直さ加減、

「悟り澄ませば斯樣あろかさはさりとても驚いた。」

大貝の臣長島徳右衛門驚いたが然し成程禪家の僧は斯樣あらうと感心致し又其早速の承知を喜むで二「左樣なれば禪師様立戻りまして急ぎ取掛りまする事で、何分とも宜しふお願ひ申しまする」二「ア

宜しい出掛るのは明日とするが然しブラ〳〵何處へ如何歩いて行くか分らんから、別に急がせんでも宜しい、其方より先へ着くか其れとも二三年かゝるか　彼「へゥ二三年　二何とも分らない」

『成程こいつも有り相な事。』

徳右衛門聊か面喰つたが　彼「御足の向かぬ節は據所ございませんが何卒成るべくお早く御出遊ばされる樣　二「だから其方より先きに着くからな　彼「へい何分宜しく」と徳右衛門はとても當り前の言を云つて居ては適ふ事でございませんから、承知せられたのを何よりの事と茲に暇を告げて立歸ります、さて新左衛門に於ても其日は

鷹ケ峰へ歸りましたが翌朝早くやつて參りました丁度禪師は朝飯の處　二「オヽ新左衛門大分早いナ、モウ一杯喰べてから出掛る少し待つて呉ん　新「どうぞ御ゆるりと召上れ」例に依つて氣樂なもの、

『是れが其處等へ行く事か、氣の向き次第ぢや幾年か、處定めぬ草枕、歸りも分らぬ長の旅。』

やがて朝飯を濟ませた禪師　二「ドリヤ出掛樣かな新左衛門、兎に角伊勢路へ行つてやらうな　新「左樣其れが宜しふございませう」其内禪師は鼠の着物に麻の法衣、造作も無く支度が出來る、

『こゝに立出る大徳寺ブラ〳〵と歩まかせ、亦口まかせの氣散じ

に、詠合ふ歌は悟りの奥、實に面白の旅衣、大津の船を振出しに參宮詣で濟まされて、やがて着いたる關の宿。」

二十四

禪師新左衛門は大貝家へ御着に相成ますと主人濱之亟子息甚内續いて長島德右衛門を始め家臣一同恭々しく出迎へて其喜びは一方でございません、禪師「地藏は」とお尋ねになれば、今京都の佛師閑慶の弟子金吾と云へる、妙手の參つて一心に刻みッ、あるとの事でございますから、然ちは出來るまでをと大貝家に暫くの御滯在、

「世にも稀なる名僧智識、粗、怨ありては相成らずと、其饗應はある限り、及ぶ限りを盡さるゝ。」

然し禪師はあまりもの〳〵しく饗應れる事などは嫌ひ 「ナア新左衛門此れだから俗物は厭だ」と密かに仰有つて、毎日新左衛門を伴れ伊勢は名所の多い處でございますから其方此方と御見物に暮らして居りまする其内に出來上がつた關の地藏、然らばと愈々開眼を致される事に相成ました、

「さて今日こそは其當日、道德高き御僧が開眼の事聞き傳へ、其御經を聞かうには必らず罪障消滅よ、佛果菩提の爲ぞとよ、或は山越

へ川を越し、集ひ寄りたる人幾千。』

實に關の宿も狹い位ひ、時に城主大貝濱之亟は子息甚內を始めと致し臣等一同を從へ、其地藏尊を建立致したる關の宿中寶龍寺の境內へ參られる、

『安置せられし地藏尊、其周圍には錦の幕、燻る沈香供物、今や禪師の御出と待つ間程無く此方へと麻の法衣の見得もなく新左を共に禪師殿』

其れと見るより大貝濱之丞始め一同御出迎ひ申上る、

『四邊に集る人々は、さてこそ彼れが一休樣、此世にお在す生佛お

有難やと動搖きつ、婆は念佛の聲上げる。』

濱之亟は一禮を致し『今日地藏開眼の事忝け無う存じまする』

『イヤ何の〳〵わけもない事、ドレ開眼をして遣はさう』と嬉て禪師はツカ〳〵と地藏の側へお寄りになる、

『如何なる事をなさるゝかと、息をば呑むで數千の人、皆一樣に見てあれば、禪師は高く打笑ひ。』

『アハヽヽ出來上つたナ地藏、イヤ變な顏を致して居る……只今一休が開眼をして遣はすが、開眼致さぬ中は只の石ころちやよく聞け開眼すれば六能道化の地藏尊、世の人々が尊むぞ然れば尊ま

れても已惚ず石ころの昔を忘れず、人々に利益を與へるのぢやぞ、分つたのか分らぬのか未だ變な顔をして居る」と這麼言を云ながら暫く地藏の顔を見て御在になつた禪師、

『法衣の袖を組合はせ、睨むが如く眼を見張り。』

「汝元來大谷山の石なり、緣有つて地藏となる、我が是れ娑婆以來の佛を拜せよ」と大音揚げて唱へ終るが否や、地藏尊の頭へ向つて尿をした、イヤ見て居た一同驚くまい事か、

『中にも大貝濱之亟、見る〳〵面色朱の如く。』

「アイヤ禪師ゾリヤ何でござる」と聲震はせ言はれる傍らにあつた子息甚内、是は年若なり殊に餘り賢明な若殿で無いのでございますから前後の思慮などはないッカ〳〵と禪師の前へ詰寄り 「ヤア狂ふたりな禪師、舍弟母者が菩提の爲、亦衆生濟度の爲とあつての此建立、謹むでなすべき開眼をあまりと云へばあまりの振舞、身不肖ながら伊勢の國の城主大貝濱之亟の一子甚内、返答に依つては捨て置かんぞッ」

『刀の柄へ手を掛けて、今にも拔かん其息込み。』

其時其傍にあつた新左衛門 新『甚内殿疎忽あるな、如何あらうと禪道の奥を極められる禪師の開眼、且は其御身の上を御存じあらう

滅多な事あらば容易であるまい」

『言はるゝ此方に德右衛門、甚内の側に駈寄りて、其袖押へつ眼顔の諫め、禪師は甚内見返りて』

「何を怒る愚な小僧ぢや、賴むと言ふから遙々と京都から參つて今日の開眼、賴まれ〳〵ばこそ俺の儘ぢや、其方こそ狂るふて居るナ……ヤレ〳〵詰らん事だ新左衛門モウ參らう、如何に一休でも斬られては痛いからナ、コレ小僧勝手に怒つて居れ、其れで折角の開眼も何にもならぬは、噫度し難し〳〵」と仰有つて、新左衛門を伴れ呆きれて居る數千の見物を押分け、怒り返つて居る甚内、滋之亟

へ目もくれず致して、其儘此關の宿を御出立になつて了はれました

二十五

『禪師は尊き御身柄事過失らば、家の爲容易ならずと知る故に殘念ながら是非が無い、後見送つた滋之亟、胸を押へて其儘に。』

『後は其方共宜しく致せ」

『言葉殘して歸られる。』

乃で子息甚内は多勢の家來に言附けて、清水を汲ませ自ら先立になつて其地藏尊をすつかりと洗ひ、改めて寶龍寺の住職を賴み、生

花を供へ香を焚きなど致し、

『讀上る經聲悉く、人々唱ふる念佛の聲、斯て暫く時うつす、折柄コリそも如何にせし、地藏を洗ひし其者共、何れも身躰震へ出し急かに變をおぼえたり。』

不思議な事もあるもので甚内始め一同ウン〳〵と唸り始めました是れを見た老臣德右衛門は大いに驚き、さては道德高き一休禪師が開眼に對し、たとへ尿をなされしと云へ其れを俗手に改めしに依つての咎めに相違無い、禪師へ對して御詫申上げねば此上如何なる事の生せんも計られずと、急ぎ主家へ立歸つて右の由を申上げれば、

瀕之亟も茲に頷かれ　曰オ、予も一度は怒りたるも遙々京都より御越されての開眼、世にも尊き禪師の事、德右衛門　曰ハッ　曰予は只今會得致した……」

『想へばあれぞ世の悟り、妻子失ひ悲みの未練に刻む彼の地藏、祀る心は凡夫なり、彼の開眼は我への諭言。』

曰「德右衛門予は是より禪師の跡を追ひ、御詫を致す、禪師は何處をさして參られたか　曰「此頃の御言葉に三河路へ御出ある由承はる多分は桑名より御乘船かと存じます　曰「ウム左樣か、では只今まり直ぐ馬にて追着かう、禪師は徒歩途中にて出會であらう、用意を致

せ」

是より急ぎ用意を致し、徳右衛門を先に三四の家臣を従へ大貝濱之亟に於ては馬に打乗り、

『桑名をさして禪師の跡、來たりて見れば恰かも可し、今禪師には船茶屋に出船待つ間を地藏の噂、新左衛門と語り居る。』

此体を見た濱之亟ヒラリと馬を下り家臣共々禪師の前へ參られて

『禪師様是れに御出遊ばされましてムりますか、大貝濱之亟御詫に罷り出ましてムる、先刻地藏の開眼有難き事、心も足りず其節の御無禮、殊に悴甚内性來の愚にあるまじき彼の過口、何と申譯も無

之さ次第、何卒御許に預り度く、御跡を追ひ罷り出ました」と濱之丞茲に詫入れば、

『共に老臣徳右衛門、御袖に縋り禪師様、最前御立出の跡、開眼頂く彼の地藏、洗ひ落せし其時に實は云々斯々と、詫つゝ茲に物語れば。』

「イヤ左様か恐しい事だナ、折角俺が一心を籠めて開眼を致したのを、甚内何も解らぬ癖に大層な惡口を申したに依つて、地藏も立腹を致したと見へる、よし〳〵濱之亟此處まで詫に參つたとあれば俺が地藏をなだめて遣はさう 『其れは千萬忝じけない事にムりま

す。僧「では禪師樣再び關へ御越下されますので　二「イヤ〳〵モウ立歸る譯にはならんが、只今道はす品があるに依つて其れを持つて參つて地藏の首へ掛て置けば宜しい、而して地藏に一休が宜しく申しだ、其麼に怒ると化地藏になると言傳をして呉れ」と言ひながら懐ろでモグ〳〵やつて居たが、

『やがて取出す其品は、コヲそも如何にコヲ如何に、汚れかへつた下帶ぢや。』

一同「へーッ」

『と一同又呆きれ。』

僧「あの此れを地藏の首へ掛ますので　二「ア、左樣、地藏もさぞ嬉しがるだらう」あんまり嬉しがりも致しますまい、然し尿をしたのを洗つて罰が當ッたのですから成程下帶を掛たらよいかも知れません、何しろ尊い一休禪師の下帶……紙屑屋さんが失敬をするのとは譯が違ふ、

『何は兎もあれ禪師の指圖、與へられたる下帶を。』

僧「コン德右衛門其方大切に頂いて參れ　僧「へエ　僧「何だ其樣な顏を致して禪師へ對して無禮であらう　僧「然し御前も摘んで御在あそばす」

『此体を見た禪師殿、クスリ〳〵と笑はれて。』

『コレ〳〵濱之亟、其れは家來などに持たせて行つては何にもならん、地藏建立の施主たる其方が持つて參れ。』「ハッ」

『爲方が無いから濱之亟、下帶手に持ち馬の上、澁い顏をしてハヨウ〳〵。』

やがて關の宿へ戻られた濱之亟、直ぐと地藏の方へ參つて、其下帶を禪師仰せの如く掛けられました、此れは誠に莫迦氣た樣な御話でムいますが實際の事で、夫より習はしになつた此關の地藏は只今に至るまで一名晒地藏と呼むで絶へず晒の布を其首に掛てムいます何

は兎に角不思議な事には、濱之亟參つて下帶を掛ますや、其れまで惱んで居りました一同の者、身体の異變は忽ちに癒りました、是何でもない人間神經の作用でムいますが、禪師の機智は又別段な事でムいます、

『さても是より禪師には、巡る三河路其方此方、到る處の滑稽妙話欵を盡して漸々に東海道を下られる。』

二十六

『語りツ、行く一言一句、見る目利き耳足一歩浮世離れて浮世に入

り、笑ふて救へ導きの、往く先々に殘さるゝ、實に其德は凡ならず。』

今日の言語で云ふと所謂狂的といふ樣な眞似を爲さる事もムいますが、其底には皆知らず間に世を諭し人を導くのでムいます、今更に申すまでもありませんが實に奇代の名僧、さて禪師に於ては遠州秋葉へ御參詣、其れより致して、甲州の身延信州の善光寺と各宗の大寺を御巡りになり何れも其到る處に例の滑稽、

『巡り〳〵て參られたは、此處ぞ信越境なる牟禮へ泊りの明る朝、馬を雇ふてシャン〳〵と驛路の鈴の旅心、言はれぬ景色眺めつゝ、

馬士が高聲面白く、亦口吟む道の歌新左見返り附合の、負けず劣らず打興じ、急がぬ旅のゆたかなり。』

馬士「ナア御出家さん、此先に關川の御關所つてね、ゐらく八釜しい御關所があるだが、貴方ア手形ア有るかね」「ウム關所があるかな……手形はないが其樣物は要るまい」馬士「其樣物は要るまいなんて馬鹿ア言つちやア不可ねへ此處はハア別段と八釜しい關所だ、ちやア後馬の方ア手形ア持つてるかね」「新持てないアハ、、」馬士「あれ笑ひ言ぢやアねへ手形が無くば通る事がなんねへだヨ、然し何だア金へ三百出しやア其關所手前の茶店の爺樣が書いて呉れるだ

二「何だ金を出せば手形が出來るといふのか其れは怪しからん、そんなら猶手形などは要らない　馬士「馬鹿ア言はねへもんだ其關所の役人てへのは鬼九十郎と綽名アする位へで一通りの嚴ましいぢやア無へだ　二「ウム鬼九十郎其れは面白い　馬士「氣樂言つて詰らねへ目に遇はねへ內に手形ア書いて貰つて無事に通るが可いだ」と馬士は却々の親切者でムいます、軈て其關所手前の茶店の處で馬が着く

二「イヤ御苦勞々々々種々親切に注意をして呉れて有難い、新左衛門馬士に心附けをして遣れよ」と茲で馬士は喜むで禮を繰返して其茶店の葭簀の脇で一休みして居ります、禪師と新左衛門は床几へ掛

けて鳥渡お茶を喫んだばかり、

『手形を書かせる樣子も無い、やがて茶代を其處へ置き、大きにお世話と立出る、茶店の爺は呼止めて。』

爺「ア、モシ〳〵今馬士衆の話では手形がない樣に聞きましたが手形を書きませんでも宜しふムいますか、とても其儘で御通りは難かしふムいます　二「イヤ〳〵手形はなくても介はん對手が鬼ぢやいふではないか」

『鬼の濟度は佛の役、金で作れる手形なら持つて行かぬが正直ぢやさア〳〵參ろと袖打拂ひ、關所の方へと參られる。』

關川の關所といふのへ來たつて見ますと上番が一人に下番が二人即ち上番は鬼九十郎成程嚴ましさうな顏をして居ります　九「コレ〳〵何れへ通る　二「ハイ〳〵向ふへ通る　九「えッ白痴た言を申すな手形を見せい　二「無い　九「何無い、イヤ此坊主上役人を何と心得居る無いとは禮を知らぬ口上だ　二「けれども無いから無いアハヽヽヽ　新「拙者も同じく無いアハヽヽ」と二人して笑つた、イヤ下番上番怒つたの怒らないのぢやアない　九「默れ坊主　二「イヤ坊主は言はんでも分つて居る、手形が無ければ通す事は成らんと言ふのか　九「申す迄もないは……　二「ぢや此處で書いたら宜からう　九「え

ッ默れ　二「アハヽ、又默れか、成程鬼とは能く言つた　九「其方の書いた手形が何で役に立つか、出家なれば何宗にして本山は何處、其管主が許しの上寺社奉行の奥印がなくてはならん　二「然し妙だな其れ程嚴ましい物が前の茶店で賣つて居るのはおかしい、ぢや猶且買つて來る方が可かつたな新左衛門　新「アハヽ左樣で　二「だか新左衛門お前が許して來れゝば鬼の云ふ通りの手形が出來るのだ、何うだナ役人此處に居るのは京都の寺社奉行蜷川新左衛門だが、此處で書いても差支へはあるまい」

「言はれた時に九十郎、さては吃驚コリャ大變、慌て密に達しあ

る京都に名高き一休殿、近く此邊御通行心着けよとあつたるが、これぞ禪師に御在せしよ、知らぬ事とてコリヤ大變。赤鬼の樣な顏をして居た九十郎即ち靑鬼となつて式臺へ飛下り

九「さては京都紫野大德寺大禪師にムりましたか、先頃重役より申來りましたるも御尊顏を存せぬ事とて重々の無禮、何卒御許し下されます樣」

一「イヤ〳〵左樣に詫る事は無い、此方も其れと名乘らぬ事ぢやが致し方もないが、九十郎どやら旅人を正し上の詮を全うするのは宜しいが、茶店の爺が手で出來る樣な手形に依つて其儘通す樣な事では何にもなるまい、然れば手形の有る無しにかゝはらず克く旅人の扮裝に心着けて役を勤めにやならん」

九「ハッ恐入ましてムります」

一「イヤ解つたかナ」

『解れば鬼も佛ぞや、其れでは通ると氣も輕るく、笑ひながらに出られる。』

是も道中の語り草

一「新左種々の事があつて面白い却々京都へ歸る氣が出ないナ」

新「左樣でムいます旅の味合は又別段に感じられます」

さる程に猶歩まかせ、越路潟直江津越へて親不知、そこは難所の駒返し、危さ道も恙なく日をば重ねて來たれるは、越前福井の城下

なり。』

此地には吉祥山永平寺と云ふ曹洞宗で有名の大寺がムいますが、禪師は問答などなさるのを喧さがつて此寺はお立寄りにならず兎角俗事のみ面白がつて御出になる。

二十七

此越前福井の城下へ着いて、宿を取ました時、如何致した事か新左衛門の顔色が勝れません、此れに御心着かれた禪師は 二「何うかしたか新左、大分顔色が惡い樣だが 新「お尋ねで恐入ますがイヤモ

ウ新左衛門も年を老りましたな 二「大層元氣の無い言を申すではないか 新「ハイッイ申上げるのも殘念に心得て其内には癒らうと存じて居りましたが何うも四五日前から胸が痛みましてナ 二「イヤ其れは不可ん、他の事とは違ふ病ひの時に力むのは宜しくない、無理に道中致し居るのは惡い、遠慮は要らない一足先へ京都へ歸つたら可からう 新「御言葉ではムいますが、貴下樣御一人では……… 二「イヤ〳〵其れは心配致すな俺は未だブラ〳〵歩きたいから構はずに早ふ歸つて手當をしなさい 新「では甚だ勝手ではムりますがお先へ京都へ立戻ります 二「アヽ左樣した方がよい」と茲に新左衛門は禪師

にお別れを告げる事と相成ました、

『悟れる身にも何とやら、虫が知らすか惜まるゝ、氣丈ながらも新左衛門、ハヤ老る年のもし是が、長の別れとなりもせん、本意なき事と言ひ知らぬ想ひを其れと禪師殿。』

二「さア新左衛門何時吹いて來るか知れぬは無常の風ぢや、然し病ひが重ふなつても俺の歸る迄は死なぬ樣にして呉れ　新「ハイ禪師には何日頃御歸りで　二「さ其れも分からん俺が道中で先へ逝かんとも知れぬ、まア何方にでもよいは　新「萬一此れが長の別れと相成ましたら　二「ウム其れも茅出度い」

『人間本來無一物、次ぎの道中は如何あるか。』

二「やがて又併れ立つて地獄の關所の役人でも笑ふてやらう、ちやが手當は粗末にするな、壯健で會へれば其れも茅出度い　新「では御機嫌よく」とそこで宿の亭主に賴むで通し駕籠の用意、

『茲に別れる宿屋の門。』

二「アヽ鳥渡待て新左　新「ハツ　二「此珠數を遺はす、俺も共に駕籠に乘る心　新「有難う辺ります　二「氣を着けて行け　新「ハイ」

『駕籠は走つて京都へ向ふ、後に殘つた禪師には、其夜は其宿にひとり蝦の、流石想ひは新左の上、無事なれかしと祈るのも、世に在

る時の情ぞかし。』

其翌朝早々に福井を出立、元來其れと名乘らぬのでムいますから宿屋に於ても普通の扱ひ、

『御機嫌宜うの聲をば後、きのふに變る一人旅。』

如何に悟つた御身でも面白いとつまらないの區別はあると見へまして、旅は道伴れ世は情け、どうも一人では氣が乘らない、物足りないなと思ふ時は必らず新左衛門の事を想ひ新左衛門の事を想ふ時は京都が戀しくなるといふ道理。

『されば禪師に於かれては、福井を出て二三ヶ所通りながらの見物に、急ぎ京都へ戻られる。』

京都へ入るや其足を紫野へは向けず致して直ぐ其儘鷹ヶ峰の新左衛門の屋敷へと參ります。

『時に蜷川新左衛門、越前福井に御別れして屋敷へ戻る程もなく、夫れ命數の來たりしか、妻子が餘る介抱も、効無く今日は明る日は、と、禪師の給ひし珠數繰て西へ出直す旅支度。』

ハヤ新左衛門往生を待つばかり渾々として居りましたが、突然スツクリと起上つて　新「コレ禪師樣が御出に成つたぞ、皆御出迎へを致さんか」と判然と言ふかと思へば亦元の如く倒れて渾々と眠りま

心丸い

「傍に看護の一同は不思議な事と想ふたが、此れぞ悟道の究めの極以心傳心自然の妙、時に聲あり玄關白。」

「新左は如何ぢや、一休貴今戻つたぞ」

「聞く一同は亦驚き不思議な事と出迎ふ病間に入るや禪師には新左衛門が枕邊に。」

「新左衛門遠からかな、心鎮めて面白う死ね」

「語ゆゑ深き其言葉、聞くや新左は聲上げて。」

新「禪師」「かゝ、新「詠じます、

生なれば其あかつきに死ぬるなり

今日の夕は秋風ぞ吹く

「ホ、能く詠じた」

「言ふゆゑ禪師は此時に、持つたる如意に春中を打ち。」

「夫、自業自得、今彌陀の淨土へ案内、

一人來て一人で行くも迷ひなり

來たらず去らぬ道を教へん

喝ッ」

「其儘蟾川新左衛門、茲に瞑目七十一、笑ふが如き大往生、側に居

並らぶ一同は、禪師の引導其覺悟、何れ劣らぬ其樣に感じ入らぬはなかりけり。』

『實に世に立派なる臨終でムいます。

二十八

新左衞門を送り、紫野新樹庵へ立戻られた一休禪師、

『別れて居ても世にあらば未だ、全く去りし其跡は、流石の禪師も何となく、心淋しく思召、佛事供養に日を過ごす。』

俗人は猶更、斯かるお方は斯かるお方だけに、語合ふ程の人が世

に尠ふムいますか友を失ふた其當座の淋しさは又別段でムいませう然る所茲に又京都に事が起りました。

『是非無きものぞ天下の變、時に風雲穩かならず、室町御所に軍を擧げ、將軍何ぞ色めきて、世や亂れんづ氣配なり。』

此取沙汰日々に烈しく相成つて參りますので、禪師に於ては悉く苦々しき事に思召噫厭ふしと嘆じられて、又紫野新樹庵を弟子等に任せ、京都を捨て泉州へ下り、彼の堺住吉の境内へ庵を結び、

『松風清月友として、今こそ禪の三昧に其名も茲に正菜庵。』

京都の擾亂を餘所に致して、獨り靜かなる日を送つて居りますと

或日此正菜庵の門に「頼まふ、御庵主は御在かな」といふ聲

『禪師此方の圓窓を明け、覗いて見れば面白や牛を伴れたる風流男。』

○「ウムお前だな」と禪師が突然言ひますのを　○「ハイ私だ、入つても宜しふムるか　○「ア、可い〳〵、ぢやが牛は入れぬ　○「イヤ御尤も」

『やがて此方の梅の樹へ、牛を繋いで其男遠慮も無しに打通る。』

實に面白いのは風流人の交際でムいます、未だ共に一面識も無いのでムいますが、牛を伴れた男は元來禪師を慕ふて訪ひ寄りました

もの、禪師が亦見ると直ぐ「ウムお前か」と言ひましたのは、此處へ庵を結むでより噂に聞いて其者を知つて居るのでムいます、其名を牡丹花肖伯と云つて當時此堺の濱續きに家を構へて居る處の歌詠み、

『此れも浮世を餘所に見て、花に俳諧月に歌、華奢風流に日を送る亦一代の奇人なり。』

生れは是亦世に尊き久我大納言道秋卿の次男に致して幼名を藏人と申上げた御方でムいます、其れに此牛を伴れましたのは、兼て風流行脚の諸國巡りの途中、偶々詠むだ歌の德に人より貰ふたのでで

さいまして其れより道中をするには其脊に乘つてノソリ〳〵と巡つたといふ却々變つた御話があるのでムいます、何しろ稀代の名僧と一代の歌人が寄つたのですから、住吉境内の風韻實に趣き深い事でムいます。二「イヤ可く來られた、噂に聞いて一度會いたいと思ふて居た處ぢや　貸「何卒お交際を願ひたい、語らうは濱の松風、他に友とてもあらぬ身　二「お互ひぢや、是から毎日來なさい、俺も行かう」

「語り出せば興盡きず、歌にて問へば詩に答へ、さては附合ふ俳諧に、今來し友が幾昔古き馴染の如くなり。」

禪師が手拵への粥の馳走に、夜に入るまで物語りを致しやがて暇を告げて立歸らうと門口へ出ますと、恰度今月が上つて正菜庵の軒へ斜めにさし込むで居ります、時に肖伯は禪師を見返り、

夏の夜の影踏む道の忘れ貝
月に寄せ來る住吉の濱

貸「禪師如何でムいますな　二「ウム面白い、樂しふ交はる志しはそこぢや、這度は何日來る　貸「命があれは明日　二「アハヽ、死むだなら俺が訪ふて引導を渡してやる　貸「イヤ禪師折角でムいますが死むで後の導きは詰りませんな願はくば引導は息ある中　二「ぢや死ぬ際

か　肯「左様で　二「お前今死ぬといふクギリが分るか　肯「ハツ……

二「アハヽヽヽ眠むるクギリさへ分るまいに」

二「成程クギリは分らない、肯伯一本やられたが、然し禪師は其間の息ある中の引導とは實に味深き言葉ちやと心密かに御感服。」

其後はモウ毎日の樣に肯伯は禪師が許へ參つて、詩に暮るゝ日、歌に過ごす夜、亦禪の敎へを受けて居りまする。

二十九

此の泉州堺の濱の町に、代々の老舗に致して小西屋利兵衛と云ふ

繁昌な藥種問屋が ムいます、其小西屋に一人の悴が ムいまして其名を竹次郎と云つて、御約束の道樂者。

二「通ふ千鳥のちぬの浦、乳守の廓に全盛の、地獄太夫にうつゝなくて、こゝに足かけ四年越千兩箱を二ツ三ツ、脫す鍵屋に夜も晝も、だゝら遊びの極樂息子。」

乳守の廓で鍵屋長兵衛と云へば一の遊女屋其一と云はれるのも此地獄太夫が居る故でも ムいませう、是へ通ひ詰た小西屋の悴竹次郎嘸困つたものだと兩親の心配は一方でありませんが、後にも前にもたつた一人の子ではあり大身代の事で ムいますから、何日かは心の

改まる時もあらうと其儘に致して置きましたが、

『手綱ゆるめた狂ひ駒、何日止むべくもあらざれば、これではならぬと兩親は思案定めて一層の事、太夫を落籍せ忰の嫁、他に爲樣もあるまいと、忰に言へばそれはマア夢ぢやないかと飛上り。』

成程此れは飛上つたかも知れない、無我夢中で凝つて居る花魁を親が許して落籍をするといふのだから此れ程有難い話はありませんが、尤も野暮を云つて居る内に大身代をメチャ〳〵にされて了ふ事もあるのでムいますから一層此方が家の爲でムいませう、

『されば忰の竹次郎、晴れて鍵屋へ落籍の相談、太夫へ其れと言聞

ければ、こりや又意外太夫には、嬉しき事ぢやあるけれど、子飼の中から鍵屋の世話、其恩さへも送らぬに、今身脫けしてゆく事は情が薄ふムります其れ程厚き思召、妾を思ひ下さるなら年季濟むまで通ふてと直ぐの落籍を合點せぬ。』

さア然樣なると大變な事、地獄太夫の年季は十年、今まで四年通ふたのでムいますから差引て後六年、

『今まで使つた其金はザッと數へて三千兩、後六年とある上は、萬兩富源も泡となる、其れぢや話が纏まらぬ、通ふも却々落籍もならず、』さりとて迷ふた心の駒何で諦めつく事か。』

折角飛上つて落籍の相談が不調と來たので、竹次郎はすつかり落膽致し、

『哀れや其れを苦に病むで、間の内に入つたまゝ、太夫々々と其ればかり。』

少し精神に異狀を呈したといふ始末、左樣なると亦兩親の心配は一層、すると住吉の境内に京都大德寺の大禪師一休樣が庵を構へて居らぬると聞きましたる處から、是は一ッ禪師に御願ひをして竹次郎の發狂を癒して戴かうと、

『小西屋番頭勝兵衛は主人の命に住吉の正菜庵へ罷り出で、事の始終を物語れば、笑ふて聞かれた禪師には、折柄今日も來合はせる壯丹花肖伯見返りつ。』

『イヤ肖伯長生をして居ると却々面白い事を頼まれるて……だが地獄太夫といふ者はエライな、辛かるべき川竹の勤めを續けて主人に義理を立て、大身代の嫁になるのを直ぐ合點しないのは見上げたものだ、其れ程の者故忰どんの凝るのも尤もだ、然し發狂までしなくても宜ささうなものだ　番』

『へエ恐入ます　』『何しろお前の處へ行つてやらう、俺は隨分さまゝな事をやつたが、發狂した者を取扱ふのは始めてぢや、然しナニ直ぐ癒るだらう　番』

『何卒禪師樣の御

徳を持まして何分とも御願ひ申ます　二「ア、よい〳〵ではお前と同緒に行かう、肖伯も行きなさい　肖「私が御同行しても何の足にもなりますまい　二「イヤ左様でないヨ、お前も禪を學ぶ者ぢや發狂人などを見ると悟りの底が會得出來るものぢや　肖「成程、ではお供致しませう　二「左様しなさい牛は如何した　肖「伴れて來て居ります、

二「ぢや同緒に乘せて呉れ」イヤ誠に氣樂なもので禪師は肖伯と共に牛へ合乘、番頭勝兵衛を先きに立てゝ濱の町の小西屋へと參られます、

「土藏は五戸前、黄金は山、そも此小西屋利兵衛とは、同じ呼び名

の總本家。」

實に大層な物でムいますが何しろ一人の悴が道樂の揚句を發狂と來て居るのですから金に代へられぬ苦勞、處へ番頭の迎へに直ぐと禪師が御出になつたといふのでもう家内は大喜びもムいます、一同其れへ出て交り代りに御挨拶を申上る　二「イヤ左様〳〵々低頭をしては困る、其れを受けるので此方の首が痛くなる、肖伯斯様いふ場合だ手傳つて挨拶を受けて呉れ」

「やがて主人の案内に、悴の居間へと通らるゝ。」

利「悴、尊き禪師様の御越ぢや御挨拶を申上げろ」

『言ふても此方は氣狂ひぢゃ、ニヤ〳〵〳〵と笑ひつゝ、禪師の顏を眺めたが。』

竹「オヽ、能く來たな太夫、待つて居たぞ太夫……」「オッ是は成程エライ熱ぢやナ　利「禪師樣何分斯樣な言のみ申して居ります、御察しを願ひます　二「ア、宜い〳〵心配致すなコレ竹次郎ッ」と禪師は突然大きな聲をなされて　二「俺は一休ぢやッ」

『言はれた時に竹次郎、思はずハッと心着き。』

竹「一休樣とは不思議にも正氣な聲を出しまし次、是は妙樣でムいませう、譽き渡つた名僧智識、其尊い一休といふ名を

禪を極めた迷ひ無き聖に名乘られたのでムいます、殊には竹次郎多少の學問もあり其道の敎へも知る者でムいますから、斯は心着いたのでムいませう　竹「禪師樣には斯樣な處へよくこそ御出下されましたゝ、オヽ太夫お前は何うして禪師のお供をして來たのヂャ」と這度は禪師の後ろに居る食伯の方を見てニヤニヤと笑つた

『これには肖伯大弱り、何と返答の爲樣もない。』

二「アヽ、肖伯お前が太夫に見へる樣だ　肖「左樣で驚きましたナ

二「コレ〳〵竹次郎俺の供をして參つたのが太夫に見へるか、是は太夫ではない牛の兄弟分だ　肖「禪師酷い言を仰有る　二「ナア竹次郎

何でお前は左樣太夫の事ばかり云ふのぢや　竹「だつて太夫が無情ふムいます十年經ねば私しの處へ來ぬと申します　二「ソリヤ酷いでは無いか太夫、折角兩親も許したといふのに左樣たゝ熱ふばかりなつても不可ぬ、な竹次郎お前は俺が分つたな　竹「ハイ禪師樣で……

二「ぢや氣を鎮めて能く俺の言ふのを聞けよ、今お前に此扇を遣はすが此歌を讀むで其意味を考へなさい、よいか三日も考へたら解るだらう、其れでな萬一三日經つても解らなんだら其れを地獄太夫の許へ持つて行きなさい、而して太夫に聞くが宜い」

『如何なる歌の書かれしか、其扇をば渡されて、其僧禪師は一間を

出で。』

二「利兵衛とやら、マア彼樣して置いたら他分三日の内には心が鎮るだらう」と仰せられて、やがて肖伯を連れて立歸られる。

三十

『後には悴竹次郎、禪師の給ふ扇の歌、

暗の夜に鳴かぬ鴉の聲聞けば
　生れぬ先の父ぞ戀しき

繰返し又た繰返し、幾度讀めどその意味の何んと解くべき樣もな

いの』

竹次郎は實に三日三晩といふもの其歌の意味を考へましたが何うしても解りません、然し歌の意味は解りませんが、唯餘の事を思はず歌にのみ心を寄せて居りました故、自然に氣は鎮まりまして

竹「ア、是は如何して、解らない」と言つてその扇を放した時、偶と自分は何うして這麽歌を考へて居たのだらうと氣が着きました、

『心鎮まり氣が着ば、逆り狂ひしきのふの事皆一々に腑を刺す、想へば不孝限り無し、さりとても又如何にして、斯くまで心狂ひしか我れと我が身の恨めしく、噫誤れりと悔悟の体。』

實に此れも禪師の德、人の心の物に逆せて居ります時は、矢鱈異見などをしても聞くものではムいません、自己と自己に自然と感じて來ねばダメなものでムいますから乃で禪師は難かしき歌に心を寄せさせ而して自然にその熱して居る氣を鎮めさせたといふのは豪いものでムいます、然し竹次郎實く正氣に復し今までの不孝さへ茲に感じたのではムいますが、何うもその歌の解らないのは氣になります就ては三日考へて解らぬ時は廓へ行つて太夫に聞けと禪師の御言葉でムいますに依つて、兎も角もと竹次郎は其由を兩親に語り乳守の地獄太夫の許へ出掛る事に相成ました。

『禪師の德の有難や、正氣となりし竹次郎、不孝を詫つ今日茲に廓へ行くも浮き心、實く去りて歌の意味それ知りたさの他に無し。』

それは元來思込むだ太夫の事でムいますから決して悔悟したとて忘れられるものではないが、今はモウ心落着いて時を待たうといふ。眞面目なものでムいます、さて竹次郎廓へ參つて早速太夫に會ひその扇の歌を見せて、有りし事どもを語りますと、

『地獄太夫も禪師の德、兼て聞くなる悟道の奥、さても尊き御僧よ我れは不淨にある身なれ一度目見えて、御敎へ受けたきものと慕はしく手に取上るその扇、暗の夜に鳴かぬ鳥の聲聞けば……繰返し

たがコリヤ如何な太夫も遂に意味を得ぬ。』

地「竹次郎樣、何うも此御歌は妾にも解り兼ますが、此れは改めて妾から明日禪師樣の御庵へ御訪ねして承まはつて參りましよう

竹「アヽどうか左樣して下さい、では私は歸るヨ　地「左樣でムいますか、言ひ知らぬ內に禪師樣の御諭を受けた貴方は、大層眞面目な御心にお成なされましたな、御兩親樣を御大切になさいませ」

『亦豪いかな地獄太夫、手管盡すを勤めの身に、さりとは清きその言葉。』

乃で竹次郎はその儘立歸りましたその翌日地獄太夫に於てはその

扇を持つて主楽庵の禪師の許へ御訪ねを致すといふ、是まう花魁と名僧の頗る奇拔なる趣味深い對面、

三十二

『今日も牡丹花肖伯は禪師が庵に物語る、折柄門に訪問るゝ、佛を訪ふに珍らしき、鳴くや鶯その初音。』

地「禪師様御在庵に ムりますか 二「ホウ不思議な美しい聲がする肖伯誰れぢやろな 肖「左様ぢ

地「例の圓窓打明けて、外を見れば他なら如乳守の廓に全盛の、地獄

太夫が禿を連れて此方に向ふて會釋する。』

二「ヤア肖伯珍客ぢやゝ 肖「はて誰れでムいますな」と是れも首を出して 肖「ウム成程」何しろ此時分一枚繪に描かれたといふ程の地獄太夫がシヤナリ〳〵と歩いて來たのでムいますから、後から見物人がゾロ〳〵と尾いて參りました 二「ヤア〳〵大層な同勢ぢや

肖「イヤあれは見物人でムいませうコレ〳〵太夫禪師を訪はれたなら早く上つたがよい」と言ふので太夫は軈て一間へと通ります

地「不淨の身で禪師様のお側へ參ります事恐れ多うムいますが、先日竹次郎へ下し置かれた扇のお歌、その意味を伺ひ度うて參りました、

た。「アヽ左樣か……何は兎もあれ庵へ入れば俺の友ぢや一盃何うぢやな」と恰度今宵伯と語りながら爐に焚火をして自在へ燗鍋を下げ濁酒を呑むで居た處でございます　宵「さア〳〵太夫禪師自ら御酌をして下さるといふ、有難く頂いたら宜からう、人は言ふ泥水稼業、浮川竹の勤めの身」

『察すれば又不愍な事、少しも早う心しで良き夫以て貞盡し、眞の人となれよかし。』

宵「ぢやがナ左樣な身となつたのを清めるには暫らくは山へでも住むだが宜いの」

『言ふのを聞いて地獄太夫、莞爾笑ふて口吟む。』

山居して心清しと言ひつるに
濁酒さへなどか飲むらん

『出せし濁酒をその儘に、手にだも取らぬ其体は、流石に極の位かな宵伯聊か赤面ぢや。』

「アハヽヽヽ却々やるな地獄太夫、宵伯ヤレ〳〵意氣地がないナ、詰らぬ時異見をするから不可ぬ」と言ひながら禪師は有合はす紙にさら〳〵と認めて地獄太夫に渡した、太夫推戴いて讀むで見ると、

山居して飲むべきものは濁酒
とても浮世に住む身ではなし

地「恐入りました　二「それ見ろ〳〵　地「オホ、それぢやとて貴方がお詠みになつたのでない　伴「コレ〳〵太夫左様肖伯を凹ますな　伴「禪師どうも女は不可ませぬナ　二「アハ、不可ぬ女に負ける奴があるものか　地「申過ごしは御許し下さりませ、就ては禪師様此扇面の御歌の意味は　二「オヽ其れ〳〵其意味かイヤ實は其れは俺にも解らぬよ　地「えッ　二「暗の夜に鳴かぬ烏の聲聞けば、生れぬ先の父ぞ戀しき、其廢事が誰れにも解るものか、ぢやがナ乃ぢや　地「ハ

才」

『夫れ、其の解らぬのが歌の意味、解る樣なる道歌では、解かぢぬ者の病ひは癒せぬ解らぬ三日に此歌が狂ふ心を止めれば、深い意味ではあるまいか。』

二「何うぢや太夫　地「ハッ成程、能ふ會得が參りました」

『今更ならぬ肖伯も共に禪師が悟道の妙言ふに言はれず、言は絶ずに言ふた言葉の味深き、唯感じ入る他は無し。』

地「禪師樣誠に有難う存じました、では今日は此れでお暇を致します　二「アヽ左樣か又來なさい、其れにモウ新しい年が來るげな、初

春には年始に行くぞ　地「お待申まする」と乃で地獄太夫は禿を棧に乳守の廊へ立歸りました、

『さても其後それが世か、俗ならぬ身も何となく師走の月のいと早く、庵が門の梅ケ香に、年立返る新玉の、夫よ禪師が幾世々に殘す悟りの歌一首、冥土の旅の一里塚。』

茲に元日と相成ました、早々にやつて來たのは例の肖伯見ると禪師は何處へお出掛けになるのか草鞋を穿いて綿服に鼠の法衣、長い竹の先へ象て床間へ置かれてあつた闘髏を附けて、其れをかついでニコ〳〵笑つて御在になる　肖「新玉の御慶申上げます　二「芽出度い

な　肖「左様で　二「芽出度くないな　肖「へイ　二「門松は冥途の旅の一里塚、芽出度もあり芽出度もなし、何うちや肖伯是から年始廻はりちや、同緒に行け　肖「お供致しませうが、禪師かついで御在になるのは何になさるので　二「是はわざつと年玉の代りに方々をかついで廻はるのちや　肖「成程其れは面白い」何が面白いやつがあるものか元日早々闘髏を振廻はして歩るかれて堪まるものちやアない、

『元來肖伯變り者、元來禪師は其親玉、竹をかついで堺の町、馴染の門々訪問れて、彼の小西屋は言ふもさら、やがて乳守の廊へ這入り、鍵屋長兵衛の店先きから、ズッと上つて、大きな聲、』

悪氣なき此髑髏穴かしこ

これより他に芽出度きはなし

言ひつゝ亭主長兵衛の頭、其髑髏をチヨイと載せた。』

イヤ長兵衛驚くまい事か　長「何卒御前樣御勘辨を願ひます、今は元日でムいます　二「だから這麼芽出度い物を頭へ載せてやるのだ

長「へイ是が芽出度うムいますか大ア」長兵衛情けない顏をして居る、とてもへ禪師の御出と聞きまして出て參りましたのは他でも無い地獄太夫、

『今日元日の晴衣裝、其裲襠を見てあれば、金絲銀絲の綾模樣、さて美事に描けるは其名に因む地獄の樣、眷は一面の閻魔王、袖は血の池針の山、裾は牛頭馬頭淨破璃の鏡にうつす客の氣の、又今年も變らぬ樣、悟つて取るや褄下は三途の川の渡し守。』

實に大層な裲襠でムいます、是を見た禪師肖伯流石に舌を卷いて其好みに感心致しました　肖「アヽ、美事だな太夫　塢「お目に止まつてお恥しふムいます、當此模樣は斯樣な勸めを致して居ります故、來世を思ふての好み、願はくは禪師樣此裏へ御筆を戴き度う存じます　二「オヽ書いてやらう」

三十二

地獄太夫が脱ぐ裲襠の裏、豫て御筆を戴かう望みと見へて白綸子になつて居ります、やがて禪師は筆を取つて、恰度其脊中の當らうといふ處へ、一ツクルリと丸を描いてチョイ〳〵と其左右へ二本づゝ棒を出した物を描きました。

『一体全体何の畫か、地獄太夫は莞爾と合點のいつた樣子だが、長兵衛始め座に居る者、肖伯さへも首ひねる。』

長『御前樣此れは何でムりますな』

『アハ、能う出來たが解らぬか

ナ長兵衛、此りや角盥ぢや』長『へエー角盥』長兵衛はさて〳〵妙な物書いたと思つて居る、角盥と聞いて流石に肖伯は禪師が其意ある處を知りました、元來太夫は合點の事でムいますから大きに喜むで居ります、と又再び筆を取つた禪師、

一ツづゝ年をへてのよわいこし
たゞ經るものは月日なりけり

と一首書き添へました、此歌は讀み樣で誠におかしふムいますが、決しておかしい事ではない、

『是ぞ禪家の敎へなり、年を經て子を數擧げて、齡ひ保てと上に詠

み、下は太夫の身を思ひ、早き月日の諭言、畜く夫其角盥は廓の全盛夢の間ぞ、女子と生れ出しなら夫に仕へて紅鐵漿の眞正しき道行けと、望みの筆に其れとなく、心籠めての思召。』

聽て鍵屋長兵衛に於てもそれと心着き、熟々と恐入り 其御前様の思召、アヽ深い事にムります、私共も斯る稼業が厭ふしく相成ました、何時かは心を清く眞の營みを致しませう」と言へば、地獄太夫も手を突いて 堪禪師様の御諭言身に泌々と泌入りました、やがては其御筆の角盥に鐵漿つける女子らしき女子となる樣心懸けまする」

『其内出る馳走の膳部、禪師は爰に心よく肖伯共に箸取りて、其日終日四方山の御物語を遊ばされ、日暮れて庵へ戻らるゝ。』

さて夫れより地獄太夫が地獄摸樣の縫取と共に一休禪師の名筆の裏、其補襠が評判となりまして、太夫は彌々全盛を極め鍵屋は益々繁昌を致しましたが、遂に其翌年禪師が豫ての諭言に太夫は芽出度く身を退く事と相成ました時、改めて禪師が緣を結むで彼の小西屋粋竹次郎の許へ參る事となり、

『爰に芽出度く角盥、鐵漿つけた良い女房、操正しく睦まじく、齡ひ芽出度く世を送る。』

亦鍵屋長兵衛も程無く廢業して、此れも堅き營業にうつり、清い一生を送りました、實に是れ皆禪師が德の致す處でムいます、さて其後猶久しく禪師に於ては肖伯を對手に正菜庵に靜かなる月日を送つて居りましたが、

『いつか京都の擾亂も事治まりしと聞くからに、さらばと長く住吉の庵を閉じて立歸る、尊き雲の紫野、授ける道の大德寺、實に世に盡す百千萬、十萬億土に譽くなる、幾世傳ふる高德は、年來る旬の門松に、思ひは深き一里塚、誰れとて知らぬ者もなし。』

未だ〳〵一休禪師の物語、容易に盡さる事ではムいませんが、多く言はずして會得なさるべきか即ち禪の極意でムいませう、然れば筆を納めて喝つと爰に終りまする、

其御入寂は文明十三年十一月二十一日、御年は八十八才でムいました。

一休悟道錄 終

明治四十四年二月十一日印刷
明治四十四年二月十五日發行

（定價金三十五錢）

著者　曉紅生
東京市芝區三田三丁目七番地
發行者　神谷竹之輔
東京市神田區松住町五番地
印刷者　菅井十一郎
東京市神田區松住町五番地
印刷所　碇文舍

不許複製

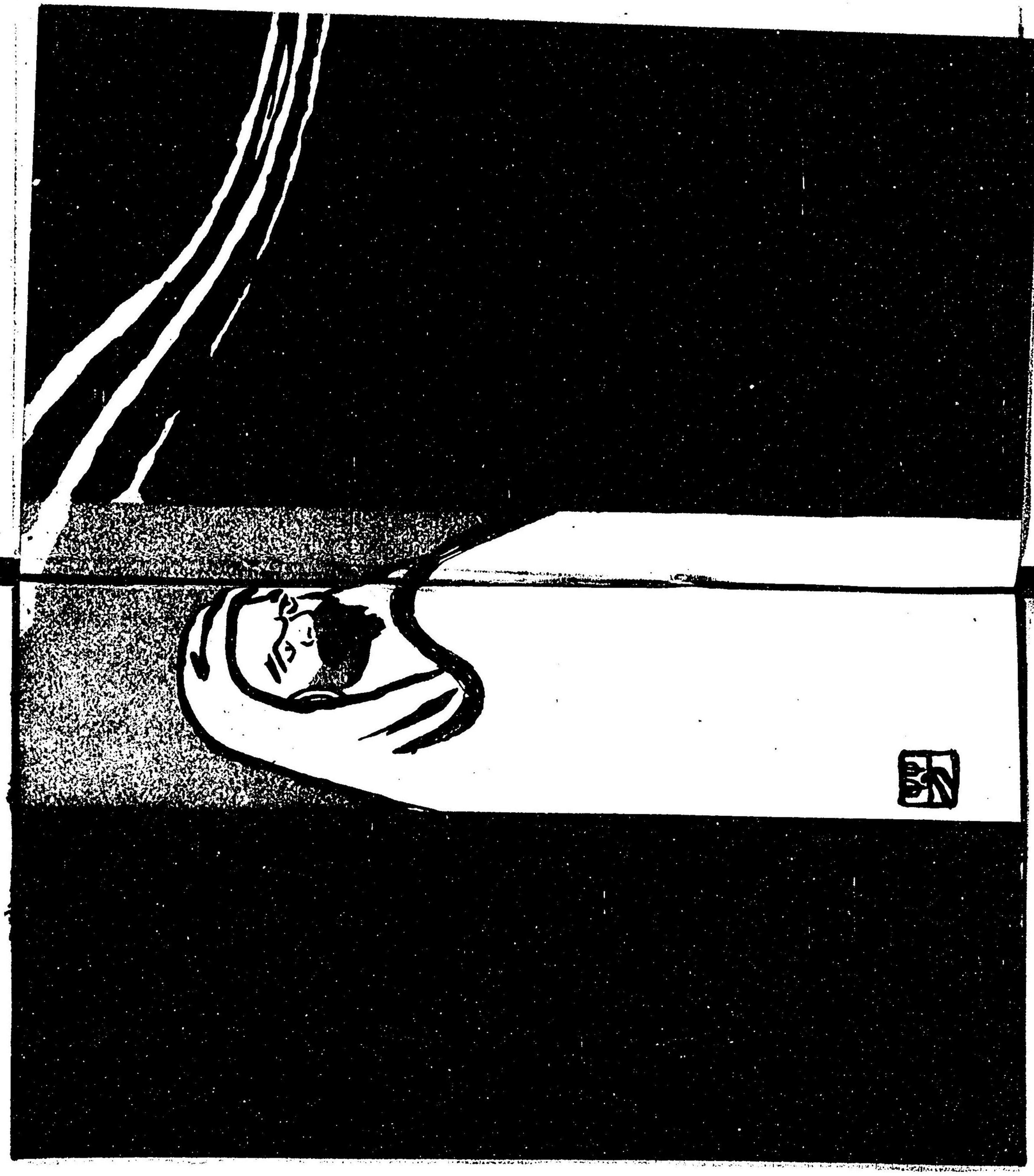
發行所　東京市芝區三田聖坂
振替口座東京壹壹壹壹六番
三芳屋書店
電話芝三一七六番

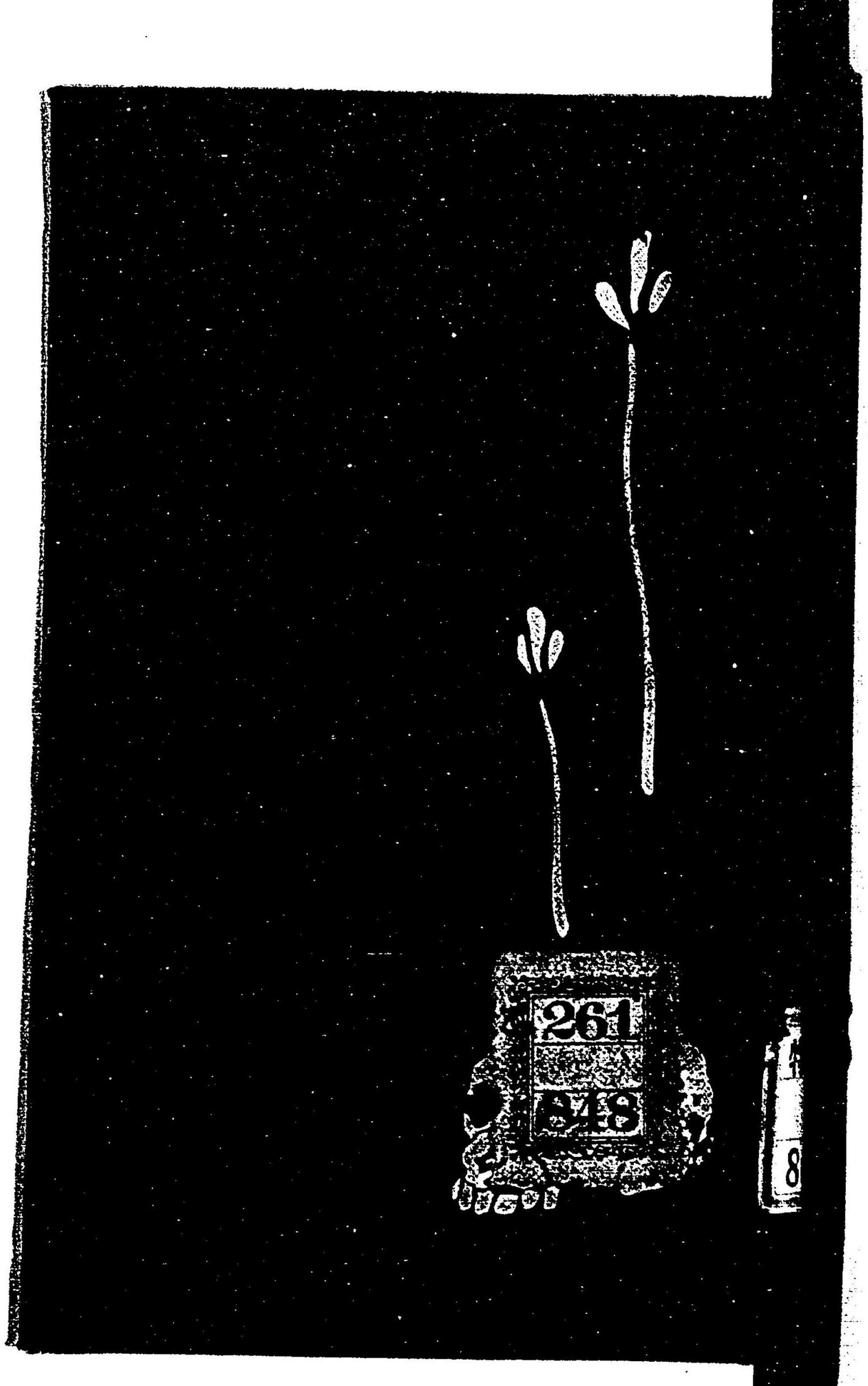
痴遊　伊藤仁太郎君序　曉紅生署

二宮尊德

四六版全一冊
紙數二百六十餘頁
金三十五錢

曉紅氏が情熱逸る筆を以て、尊德二宮先生が幼時の艱難より中年の苦心斯くて玉と成りし其一世の輝きを、遺憾無く描き盡したるは此書である雜誌文藝倶樂部は云ふ。二宮宗に隨喜する人々、いかで此書を讀まであるべき、從來二宮尊德に關する書多けれども此書の如く面白味を以て、知らず〳〵讀み了るべきものなからむ……とある、以て知るべし敢て喋々と言はず。



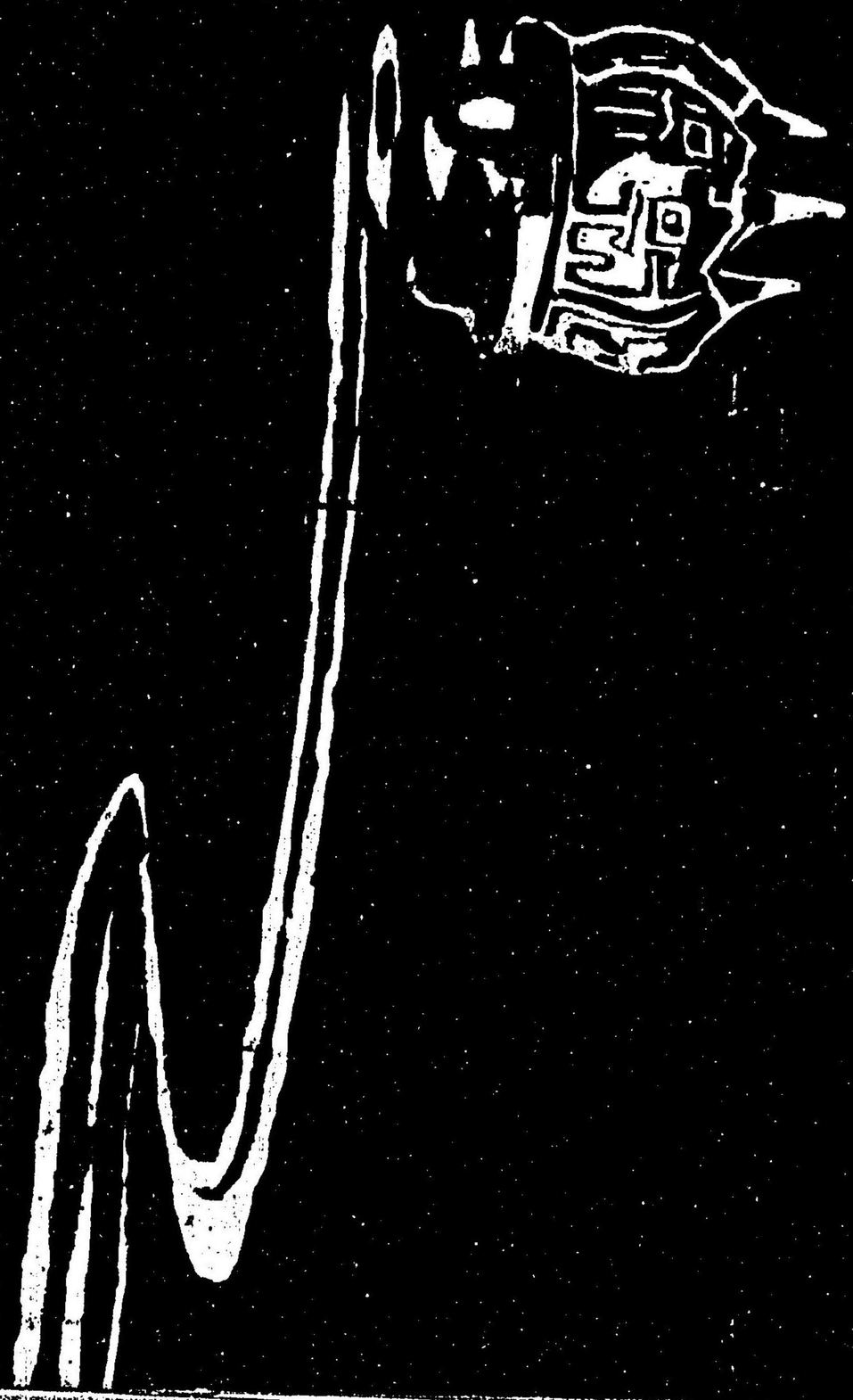


019335-000-6

特63-809

一休悟道録

暁紅生／編

M44. 2

ABG-0021